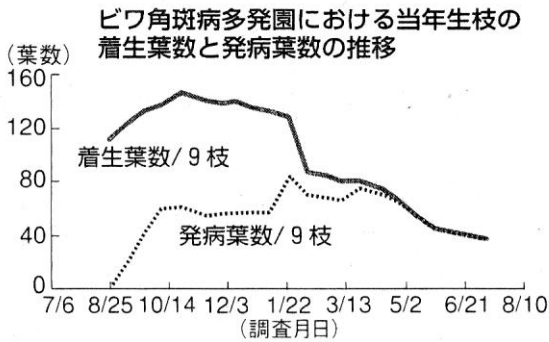


農業技術

プリズム

大村市のハウス栽培のビワ園（品種＝福原早生）で葉に黒褐色の斑点を生じ、後に落葉する障害が見られ、収穫がほとんどできない状態になっていました。この障害について調査し、三重大学に病原菌の同定を依頼



若い葉にだけ感染

ビワ角斑病の発生パターン

したところ、ビワ角斑病であることが明らかになりました。本病は過去にも本県で発生していましたが、病原菌の生態に関する情報が少なく、発生パターンや防除のタイミングなどは知られていませんでした。そこで、防除に活用する生態的なデータ

を得るため、発生状況を経時的に調査して次のような発生パターンを明らかにしました。
1、ビワ角斑病菌（*Pseudocercospora*）は、最初、葉に感染して、葉脈に沿っ

た黒褐色の角ばった病斑を形成し、その病斑の周囲はやや黄く赤褐色になります。病斑内部には黒色の粒（分生子座）を生じて分生子柄および分生子を形成します。

2、本病の病斑は、当年に生じた枝の葉（春葉）では8月ごろまでは見られませんが、9月以降10月にかけて徐々に発生し、激しく発病した葉から黄化して落葉します。夏葉および秋葉では、1～3月にかけて見られるようになり、発病した葉は後に黄化して落葉します。

3、前年に生じた枝の葉（古葉）では年間を通じて新たな病斑は形成されず、病勢は進展しません。

4、これらのことから、本病菌は展葉期の若い葉にだけ感染し、1～数月程度の潜伏期間を経た後に発病すると推察されます。

よって、本病の発生を防止するためには発生が増加する前の幼葉の時期に薬剤防除を徹底することが重要だといえます。

（長崎県農林技術開発センター 果樹研究部門 カンキツ研究室 副島康義）